

『ユートピアだより』再考—ウィリアム・モリスと精神の自由

高橋在也（東京学芸大学連合大学院博士課程）

ウィリアム・モリス（1834-1896）は、イギリスヴィクトリア朝中後期に生きた詩人・デザイナー・社会主義者である。モリスが社会主義者として運動をはじめた 19 世紀後半は、イギリス社会にとってひとつの時代の転換期であった。フランス・ロシアといった「列強」の進出により世界市場における支配権がゆらぎ、生活状況の悪化にともなうゼネストや労働者運動が広がり、それまでの社会システムがどうにも立ち行かなくなってきたという見通しがある程度広がったという点で、現代の日本社会と似ている。モリスは、壁紙やテキスタイルのデザイン、および実際の織り、染め、木版印刷といった職人仕事をしながら、ものを作るという営みをとおして生まれる精神の自由の経験を、自分自身の仕事および中世の職人ギルドの社会から見出し、新しい時代のための社会運動には、労働・経済体制への根本的批判とともに、人間が生活する際に精神が生きる場は何か、という問題が重要になると考えていた。こうしたモリスの力点は、その後の社会主義運動では概して無視されるものであった。しかし、冷戦構造の崩壊とともに社会主義対資本主義というイデオロギー対立としての構図が無意味になり、経済のグローバル化とともに苛烈な競争社会が登場する現代においては、資本主義経済の運動そのものの分析とともに、人間の生活・営みにおいて精神の自由が生きる経験、場所とは何かという模索は、欠くことができないものになっているのではないだろうか。

モリスが光を当てているのは、かならずしも言語活動とは結びつかない営み、料理や裁縫、日曜大工といった『ものをつくる』という営みである。こうした日常的な『ものづくり』の営みは、近代社会では、不払いの「家事労働」として、主婦が事実上強制的にさせられるものだ。フェミニズムはこうした賃金にならない『ものづくり』について早くから考察をしてきたが、価値のない労働を女性のみ押し付けることに反対し男女平等の分担を主張するか、またはこうした生命に直結する労働の価値を認めるときは、母性主義に陥ることが多かった。モリスの場合は、こうした家事が、主婦といった特定の人間に押し付けられるとき、それは呪われた労働にほかならぬものになるが、もしそうした家事が特定の人間に押し付けられず、むしろそこでの創意工夫がみな認められるものとなり、みな楽しめるような社会では、言葉をもって思想を吹き込む営みにも似た、人間の精神の自由が現れるのではないかと考えた。本発表では、モリスの有名なユートピア作品『ユートピアだより』の分析を中心にして、精神の自由が生きる場としての、『ものづくり』とは何かを考察していきたい。